

ワークライフバランス

和歌山つくし医療・福祉センター 井上美保子

私は医師になって16年目の小児科医です。医師5年目のときに結婚し、小学4年の息子と小学3年の娘の母親です。これまであまりポリシーをもたずに働いてきましたが、好奇心が強く、なんでも首をつっこんでしまう性格がひっばって来ていたように思います。たくさんの患者さんとの出会いから重症心身障害や発達障害を専門にしたいと考えるようになり、2016年から今の施設で働いています。この分野は医療の考えだけでは方針が決められないことが多く、患者さんやその家族、そしてそれを取り巻く医療、福祉、行政、教育など多くの人たちとアイデアを出し合っ、患者さんの生活に密着した計画を立てていくことが魅力であると感じています。医師という立場を超えて人間の生活の質という枠組みでの考え方が大切で、そこに医療の専門知識、自分が誰かの子どもであり親であるという経験、趣味や雑学の体験などが生きてくると、私は考えています。

なんでも自分でしないと気がすまない性格のためか、仕事も家庭も全力疾走してしまいがちですが、幸いにもこれまで家族や職場のサポートに恵まれた環境でした。家庭の安定を保つように仕事を早く片付け、余裕をもって仕事ができるように家庭の問題をひきずらないように気をつけています。それでも実際は周りに気を使い、うまくいかないストレスも感じますし、周りからの文句も出ますので、なんとか切り抜けているという日々です。和歌山県医師会主催の女性医師フォーラムでの講演で、「ワークライフバランスを保つためには、常に選択をしなければいけない」という話になるほどと思いました。仕事を持ちながら自分の生活を保つということは、いつも目の前に複数の選択肢があり、優先順位をつけて実行しているのだと思います。それは性別も職種も問わずみんな同じではないかと思えます。

ご縁があり和歌山県医師会の女性医師メンターをさせていただき、それ以外でも様々な年代の女医さんたちと働き方の話をする機会があります。そこでいつも感じることは、それぞれ環境もやりたいことも考えも全く違うということです。たくさん仕事をしたい人もいるし、家事や育児に専念したい人もいます。「女医＝ワークライフバランスが大変」という考え方に縛られず、その人が何を希望していてそれがどうしたら現実的に実現可能かという考えで進めていく必要があると思います。そのためには、当事者自身がどうしたいのか、どうなりたいのかということをしっかり考え、周りに伝えていくことが大切だと思います。そして取り組んでいることを応援してくれる仲間がいることも重要な成功要因だと思います。